

古典落語大系

責任編集

江國 滋

大西信行

永井啓夫

矢野誠一

三田純一

三一書房

古典落語大系 第五卷

一九六九年十月十五日第一版第一刷発行
一九七七年二月十五日第一版第三刷発行

編者 江國 滋・大西信行・永井啓夫
矢野誠一・三田純一

© 一九六九年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(二九一) 三二三一〜五番

郵便番号一〇一

振替東京九一八四一六〇番

印刷所 株式会社三陽社

製本所 東京美術紙工

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません

古典落語大系 第五卷 目次

花色木綿（はないろもめん）——白浪余談……………	七
鉄 拐（てつかい）——『鉄拐』の現代性……………	二四
指南書（しなんしょ）——名物の味……………	三六
お化け長屋（おばけながや）——名作とサゲ……………	四六
あくび指南（あくびしなん）——指南所流行……………	六六
花見酒（はなみざけ）——どこが違っているのだろう……………	七五
こんにやく問答（こんにやくもんどう）——落語の作者……………	八三
たがや——商売往来昨今……………	九三
粗忽長屋（そこつながや）——まぎれもない落語……………	一〇三
ぞろぞろ——『ぞろぞろ』讃……………	一一二
夢 金（ゆめきん）——この船頭を笑えるか……………	一二九
心 眼（しんがん）——梅喜がみたもの……………	一四四
酢豆腐（すどうふ）——噺のモデル……………	一四四
紋三郎稻荷（もんざぶろういなり）——稻荷繁昌記……………	一五五
うどんや——へんなレコード……………	一六六

文ちがい（ふみちがい）——名作中の名作……………	一七五
花見の仇討（はなみのあだうち）——鯉丈の墓……………	一八六
百川（ももかわ）——百川雜記……………	二〇三
首提燈（くびちょうちん）——二つの演出……………	二二三
鮑のし（あわびのし）——長屋のつなぎ……………	二三〇
ちぎり伊勢屋（ちぎりいせや）——久保田・花柳の伝次郎……………	二三八
不精床（ぶしょうどこ）——ナンセンスに非ず……………	二七三
黄金の大黒（きんのだいこく）——富の不均衡……………	二八一
小言幸兵衛（こごとこうべえ）——幸兵衛列伝……………	二九七
素人鰻（しろうとうなぎ）——斜陽……………	三〇九
佐々木政談（ささきせいだん）——『小僧もの』の佳作……………	三二三

装幀 長尾みのる

古典落語大系 第五卷

花色木綿（はないろもめん）

芝居のほうに出て来る泥棒とちがいで、嘶のほうに出て来る泥棒はあまり後世に名をのこすような立派な泥棒は出てまいりません。なにをやっても一人前にできないから、泥棒でもやってみようかという、一名でも泥と申しまして失敗ばかりいたしております。

「どうもお前のようなやつはしょうがねえな。仲間がみんないつてるぜ。あいつはもう見込みがねえから今のうちに足を洗わせて堅気にしたほうがいいというがどうするんだ」

「へえ、でもせっかく、こうやって親分子分の盃もいただいているんですから、あたしもこれから丁見を入れかえていっしょうけんめいに悪事にはげみますから従前どおりおねがい申します」

「そうか。お前が真心にたちかえって泥棒の修行にはげむというなら置いてやらねえこともねえ。けれど少しは人にほめられるような仕事もやってみろ」

「へえ、このあいだ、大きな庭のあるところへはいつて来ました」

「そうか」

「柵を乗り越えてはいつてみますと、芝生があつたり花壇があつたりしましてネ」

「フーン、大きな仕事をやりやがつたな」

「それが親分の前ですが大笑い、表門へまわつてみたら日比谷公園だったので」

「ばかやろう。てめえはそんな大きな家をねらうんじゃアねえ。もっと小ぢんまりした家をさがすんだ」

「へえ、そういう家はこの町内にありますよ」

「この町内にか、気がつかなかったなア」

「何しろ小ぢんまりしていて、掃除が行きとどいて電話がひいてあって」

「フーン、そりゃア何屋だ、商売は」

「ウフフフ、それが角の交番で」

「ほかやろう。交番をねらうやつがあるか。お前はとてもまともな仕事はできっこねえ。おれが空巢を教えるから、空巢でもさがしてみろ」

「空地ですか」

「空地じゃアねえ。空巢だ。留守の家をさがすんだよ」

「ああ、空き家をですか」

「貸し家をさがすんじゃないよ。夫婦で亭主が働きに出ている。かみさんが夕方、小買物かなにかでいまいをしねえで出たあとをさがすんだ。表からちよいと声をかけて返事があれば留守なんだが、あわてて中へはいってもはばかりにいるともかぎらねえ。おちついて……といってもすぐに人が帰ってくるんだからゆっくりもしていられねえ。逃げ道からさきに考えておきねえ。それでもお前のようなやつはつかまるようなことがあるかもしれねえ。そのときは逃げ口上がある。盗んだものをすぐにそこへほうり出して『まことにどうも申しわけございません。長いこと仕事がなくて遊んでおりまして、八つをかしらに五人の子供がごさいます。七十になる老婆もおりましてわずらいついておりますが薬ひとつ飲ませることもできません。ほんの貧の盗みの出来心でございませう』と、涙のひとつもこぼしてみる、『ああ、出来心じゃアしかたがねえ』とかんべんしてくれらア。うまくいきやア小遣いの少しもくれて逃がしてくれるというものだ。どうだ。わかったか」

「なるほど。よくわかりました。それじゃア親方、すみませんが風呂敷の大きいのをひとつ貸してください」
「どうするんだ」

「盗んだものをつつんで来るんですから」

「いいよ、そりゃア。むこうにある風呂敷でつつんで来りゃア」

「でも返しに行くのが面倒だなア」

「返さなくてもいいんだよ。盗りっぱなしだ」

「あ、そりゃアタチがよくねえや」

「なにをいってやがるんだしっかりしろ」

「じゃア親分、そろそろ空巢ねらいに」

「オイオイ、大きい声を出すな。内緒でゆけ」

「へえ、いつて来ます。……ごめんください。少々、ものをうかがいますが」

「オイ、隣りの家から始めるやつがあるものか。せめて町内をはなれろイ」

「いけねえ。やっぱり親分でも気がさすんだな。さア、町内をはなれたし、このへんならいいだろう。やってみるか。……ごめんください。ごめんください。お留守でしょうか。ごめんください」

「オイ、その家は空き店だよ」

「ああ、そうですか」

「表の伊勢屋っていう酒屋が大家さんだ。そこへ行って聞いてごらんよ」

「いえ、よろしいんです」

「貸し家をさがしているんだろ」

「いえ、留守をさがしているんですから」

「オウ、変な野郎だなア」

「そう見えますか」

「あやしい野郎だ」

「ごもっともさまで」

「なんだ」

「さよりならア、……ヘッヘッヘッへ、こりゃアまずかったなア。空き店じゃアいけねえや。人が住んでいなきやアしようがねえ。……ごめんください」

「ハイ」

「さよりならッ」

「お氣をつけよ。おかしいのが来たから、履きものなんぞなくならないかい」

「こりゃアいけねえ。下駄泥棒とまちがえられたい。泥棒の匂いでもしたのかなア。……ごめんください」

「ウワァーイ」

「いるんだよ。どうも留守の家なんてものはないものだね」

「なんだい」

「あのう、ちょいとうかがいたいんですが」

「いまそっちへ行くよ」

「いいんです。おいでにならなくても……あ、こんちわ」

「なんの用でえ」

「あの、この近所に、何屋何兵衛さんというかたをご存じないでしょうか」

「なんだア」

「あの、何丁目何番てえとどのへんでございましょうか」

「なんだア、この野郎、おかしなことをいってやがるなア」

「イエ、それじゃアよろしいんです。結構ですウ、どうぞ、おはいりになって」

「変なやつだなア、てめえが何か聞くてえから出て来たんじゃアねえか。何の用なんだよ」

「へえ、じゃア、このへんに、あの、サイゴベエさんという人がおりませんか」

「サイゴベエ？ そんなイタチみたいなやつは知らねえや」

「あたしも知らないんで」

「なんだア？」

「さようならッ、ウヘーッ、おどろいた、おどろいた。でもサイゴベエなんぞはうまかったなア、われながら。こんなまぬけな名前のやつはいねえもの。今度つからみんなサイゴベエにしてやろう。……ハハア、この家は少しあいているな。ごめんください。……エヘン、少々うかがいます。どなたもおりませんか。お留守ですか。どなたもないというのは物騒ですよ。泥棒がはいりかかってますから。いよいよはいりますよ。これだけことわっておいたのですから……はばかりじゃアないでしょうね。エッヘッへ、犬も歩けば棒に当たるというのはこれだね。どうでえ、いい道具がそろっていやアがるじゃアねえか。長火鉢か、こりゃアけやきだな。銅鉢もいいし落しもいいや。鉄瓶もいい形だよ。こりゃア南部かな。おう、煙草入れがあらア、一服さしてもらおう。親分がいつてたよ、落ちつかなくちゃアいけねえって。だからあわてちゃアいけねえ。泡ア食って出世したのはボラばかりてえから落ち着きがかんじんだ。(一服、ゆっくりと吸ってみて) おウ、こりゃアいい煙草だ。口はおごっているんだな。オヤ、こりゃアなんだ。羊かんじゃアねえか。薄く切りやアがつたな。しみったれてやがら、数をよけいに見せようってんだろう、ずるいや。そうなりゃアこっちは計略の裏をかいて三切れいっしょに食うてえやつだ。(ゆっくりとつまみ上げて口に入れ舌つつみを打ちながら) うん。こりゃアなかなか、うまい羊かんだ……」

「オイ、下へ誰か来てンのかア」

「ウワッ(おどろいて、羊かんが胸につかえて) す、すみません。ちよいと、あの、背中をたたいてください。ウ、ウン」

「な、なんだい。お前は」

「よ、羊かんが胸に、つかえて、ウン」

「なんでえ、見なれねえ野郎だなア」

「ヘエ、(やっ)と羊かんがノドをとったので」二階においでになったんですか」

「いま、おれは片付けものに上つていたんだが、なんだい、お前は」

「あの、ちよいとものをうかがいたいんですが」

「よせよウ、この野郎。ものを聞くやつが座敷に上りこんで、羊かんを食うやつがあるものか」

「でも、ちよいと落ち着かせてもらいましたので」

「よせやい、なんの用なんだ」

「この辺に、あの、ございますまいなア」

「なにが」

「いえ、たしかにいないですよ」

「自分できめているやつがあるものか。なにがだよ」

「このへんに、あの、サイゴベエさんというかたをご存じないでしょうか」

「はやくいいなよ。おどろいたじゃアねえか。ああ、サイゴベエはおれだよ。おれだ」

「ウワーッ、あの、あなたでないサイゴベエさん、あの、もっといい男のほうの」

「なんだ、この野郎」

「いえ、あの、よろしくいってました」

「誰が？」

「あたしが」

「なにをいってやがるんだ」

「じゃア、さよならッ……ああ、びっくりした。なにもあの野郎がサイゴベエでなくともいいじゃアねえか。まぬけな名前をつけやがったなア。けれども二階があるのに気がつかなかったなア。でもまあいいや。煙草をの

んで羊かんを食つて来ただけでもうけだった。……あつ、いけねえ。上りこんだので下駄アぬいで来ちまった。な
んで損をするかわからねえや。……おや、こりヤアまたきたねえ長屋へはいつて来ちまったなア。……ごめんく
ださい。……だれもないいな。はいつちまおうか。ごめん、くだ、さい。なんでえ。こんなところに土鍋があら
ア。なんだろう。へへへへへ、こりヤアオジャだよ。しくてやがんなア。土鍋でオジャを煮ているようじヤアた
いしたこたアねえや。でもなア、せつかくはいったんだから、このまんま帰るのもなんだからこのオジャをごち
そうになつちまうか。(茶碗にオジャを盛って食いながら)うん、こりヤアまずかアねえ。腹がへつてるとなんでも
うめえというがほんとうだ。(しきりにすり込みながら)うん、まアいいや、みんなご馳走になつちまえ。あ、こ
んな所にフンドシが干してあらア、ひとりものなのかなア。えい、こいつももらつちまえ……あ、いけねえ、誰
か帰つて来たらしいぞ。いけねえ。どうしよう。そうだ、裏口のほうから、あ、裏は石垣で逃げられねえ。しよ
うがねえから、この台所の揚げ板の下へはいつちまおう……」

「どうも、お隣りのおかみさん、すみません。留守に誰も来なかつた、あ、そりヤアどうもありがとう……。な
んでえ、誰も来なかつたつて戸があけっぱなしになつてらア。変だなア。あれ、なんだ、こりヤア、おれのオジ
ヤを誰か食つちまいやがつた。あつ、越中ふんどしがなくなつてらア。あ、あ、この大きな足跡は……泥棒がは
いりやアがつたんだ。さア、たいへんだ。たいへん……といったところで、おれの家にも何も盗られるようなも
のはねえんだからな。おれの家へ泥棒がはいるようじヤア世間は不景気なんだな。情ねえ泥棒だなア……けれど
も待てよ。この泥棒をいいわけにして大家さんに家賃を待ってもらおうかしら。そうだ。こりヤアいいときに泥
棒がはいつてくれた。……そうなると、こりヤアちよいと忙しくなつて来たよ。オーイ、大家さん、泥棒だ、大
家さん、泥棒、大家の泥棒……」

「なんだ、なんだ。あたしを呼ぶのに泥棒というやつがあるものか」

「すみません、大家さん。じつは、泥棒がはいりました、大家さん。というのに途中が抜けましたので」

「そんなところを抜くやつがあるか」

「すみません」

「なんだ。それじゃアお前の所へ泥棒がはいったのか」

「はいったのですよ、ウワッハッハッハッ」

「なんだ。泥棒にはいられて笑っているやつがあるか。たいがいものなら泥棒にはいられりゃアあわてふためてオロオロするものだ。よろこんでいるやつがあるか」

「じゃアやります。(わざとふるえ声で) オ、大家さん、ド、泥棒が、ハ、はいりました」

「なんだ、その声は。お前の所へはいった泥棒なら、きつと何かおいていってくれたろう」

「いいえ、いろいろ持つて行かれました」

「持つて行かれるようなものがあつたのか」

「あつたかつて、すっかり持つて行かれましたよ」

「なにが」

「なにがつて、大家さんの所へ持つて行こうと思つていた店賃を持つて行かれちまつたんで、すみませんが店賃の所はちよいと待つていただきてえンで」

「うん、店賃なんぞはどうでもいいよ」

「そうですか。そりゃアどうもありがとうございます。それじゃアどうぞ、お帰りになつて」

「そうはいかねえ。何を盗られたか知らねえが、ここにちようど、紙と矢立を持つているから盗られた品物を書いてやろう。お上にとどけを出さなくちゃアいけねえから」

「そりゃアまア、ようがす」

「ようがすてえことはないよ。とどけないと手落ちになるんだから、さア、はやくいつてみる、すっかり書いてやるから」

「弱つちまつたなア。いやア、まア、ふんどしが一本とねがいます」